

あいだのすみっこ不定期漫遊連載 第92回

「バッタモン」の再来, Battamon Returns

翻訳の政治学と全球化への抵抗 (2)

稲賀 繁美

(いなが しげみ/国際日本文化研究センター, 総合研究大学院大学)

5. 地域市場から全球的市場へ：商品の循環と変貌

商品が元来の文脈から脱却することdecontextualizationと、それが異郷に帰化することnaturalizationとは、同じ現象の両面にすぎない。この越境の移民の実態をみるために、ひとりの中国出身藝術家をとりあげよう。ニー・ハイフェン 倪海峰はオランダに居住しているが、馬鈴薯の形状をした磁器によって有名となった[1]。コバルト顔料による色絵の青花は、中国起源とともにデルフト焼き以来の伝統をオランダ人に印象づける。それは黄金時代のオランダの中国との交易を想起させる。だがなぜ、馬鈴薯なのか。ポテトは南米原産だが、それがなぜ、日本ではジャガタイモと呼ばれるのか。それはジャカルタの名残りであり、オランダ東印度会社経由で日本に到来した過去に由来する。ジャガイモは遠路はるばる南米から阿蘭陀に運ばれ、そこでいまでは、日常の食事に欠かせない栄養源となった。それと同様に、ニー・ハイフェンもまた、同様の経路を辿って阿蘭陀に辿りついた。ジャガイモがオランダに根づいたのに劣らず、彼もまた移民の受け入れ先の土地に根を降ろしたいのだろう。

帰化を果たした食材は、移民した藝術家存在の暗喩となる。実際、この中国出身の藝術家は、大量にイカモノのジャガイモ状陶磁器を生産したが、そこには何重もの思いが籠められている。まず、ジャガイモは

その形状といい寸法といい、掌に廻らすにぴったりだ。触覚の大切さは、とかく距離を取った視覚鑑賞ばかりに重きを置く西側世界の美術館・博物館への警告となる。そこでは対象物の物質性との接触は忌避されることが多いのだから。ふたつ目に、このいささか歪な形態は、中国の文人が四宝のひとつとして珍重した水滴を思わせずにはいない。とはいえニー・ハイフェンの品は、実際には水滴としては使えないので、良くても「水滴もどき」でしかない。西側世界近代の藝術観を確立したイマヌエル・カントは、美術作品は実用性を剥奪されていなければならない、と説いた。その「無関心性」Interesselosigkeitこそが、藝術たる存在の価値の本源だというのである[2]。こうした西洋近代の「藝術」観念に対して、ニー・ハイフェンの馬鈴薯もどきは、実用だって藝術なのに、と控えめに疑問符を呈しながら、自らは役立たずに甘んじつつ代替案を提案してみせる。みつつ目に、中国の伝統をそれとなく示唆することで、彼はいまひとつ違った用法をも暗示している。陶磁の玉を日々手に握ることで、高齢者は頭脳に適度の刺激を与え、もって痴呆予防に役立てることもできるはずだ。この「健体球」は儒教の教える孝行にも適い、長寿を祈念するという、人類普遍の願いを伝達する媒体ともなるわけだ。

そのうえで、ここでの議論に密接に関連するのだが、四つ目として、馬鈴薯を象つ

た陶磁製品は、希少性と大量生産との狭間で、尋常ならざる商品価値を発揮する。一方で、美術鑑賞にあっては唯一無二であることが尊ばれる。オリジナルが無軌道に複製できたり、みだりに偽造されたりしては困るのも、そのためだ。うかつに複製が跋扈すると、かのヴァルター・ベンヤミンの語った「アウラ」の後光が霞んでしまう、というわけである。と同時に、他方、人びとはとかくみずからの隣人が愛玩する代物を所有したがるものだ。馬鈴薯状の陶磁器は、この、あい矛盾しかねない欲求とともに満ちた絶好のアイテムだった。というのも、ひとつひとつのセラミック製品は、ふたつと同一の形態を備えてはいないが、すべて類似の形状で似通っていたのだから。同一ではないが同類、というところに勘どころがあった。

おおよそこうした四つばかりの因子が複合した結果として、ポテト^{もが}粉いの陶磁の塊は、まことに巧みに観衆の興味を喚起するとともに、いまに「ひとつ」は自分で所有したい、という欲望を、商品流通の経路のうちに掻き立てた。おまけにこの連鎖反応の誘い水というか、ドミノ効果の引き金として、ニー・ハイフェンは、無料の見本を、景品や贈答品として要路の観衆に配布するという手立てを怠らなかつた。やがて一家に「ひとつ」ニー・ハイフェンが所蔵されるとなれば、彼は社会の一員として満場一致で認知されたことになるだろう。かくして彼のデルフトへの移民は、名実ともに完遂されたことになる。

そしてその瞬間、ニー・ハイフェンはもはやひとりの「個人」ではなくなる。彼はすべての市民から承認された「商標」trade markに変貌していることだろう。これは冗談ではなくて、近年この芸術家はブランドになりおおせ、コバルトの釉薬に彩られたセラミック製の「偽」の家具——実際には中国であれば、庭に設置する屋外家具——の類を、さまざまに意匠を凝らして市場に流通させる輸出入業者へと変身を遂げた。みずからの商標による新たなデルフト焼き

を考案しつつ販売促進に努めるこの如才なき才覚によって、ひとりの個人としての藝術的才能は、見事に別個の「法人格」へと、自己変身の「脱皮」を遂げた[3]。

6. 偽文字と二枚舌

だがニー・ハイフェンの変身ないし変容は、けっして特異例ではない。それはまた、中国という地域市場から、交易都市国家オランダに代表される全球的市場への移行の典型例でもあった。その芸術家としての履歴の初期に、ニー・ハイフェンは、ネオンによる解読不明な文字を照明した壁面を展示したことで知られている。作品は《トロヤの木馬》と題された。「トロヤの木馬」とは、昨今では、コンピュータ・ウイルスではないものの、同様の悪さをする厄介者として有名だが、もともと領界侵犯の暗喩といってよい。贈り物を装ったダミーが、まんまと敵の領内に招き入れられ、難なく城壁を突破した代償に、敵陣で思う存分の侵犯行為、秩序破壊の狼藉を働く。思えば、判読不能の異文字とは、暗号運搬の媒体でもあっただろう。解読不可能性は潜在的な脅威を構成する。密かな諜報活動を営むエイジェントだ、という意味で、解読不可能な謎の文字は、「トロヤの木馬」と同義の権能を発揮する。ここで思い出される、もうひとりの中国系芸術家が、シュー・ビン 徐冰 Xu Bing (b. 1955) だろう。こちらは、みずから創意発明した偽文字の書によって有名となった。文化間の翻訳とはなにか、を考えるうえでも、彼の作品は注目に値する。ここではただ2点に限定しよう。一方で「二枚舌」、他方では「自己増殖的」(オートポイエーシス)な繁茂を検討したい。

シュー・ビンの書は、中華文明が公認としてきた漢字体系からみれば、公然たる贋作にして擬態にすぎぬという限りで、みずからの創意出自の偽モノ性を憚らず公言する。彼はまず一方では、みずからの創作が偽物であることを、ほかでもない中国の公衆に対して包み隠さず訴える。実際、漢字文明圏に所属するほどの成員であれば、誰



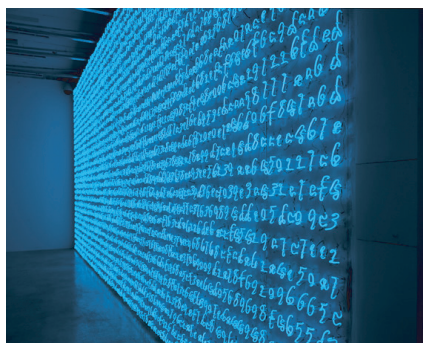
ニー・ハイフェン 《未完の自画像 VI》(2007, アムステルダム市立博物館でのインスタレーション)

しも容易に、シュー・ピンの漢字が偽物でしかないことは見抜けるはずである（それが、漢字文明圏成員の証にすらなりえる）。ところがそのうえで、彼の作品は、もっぱら西側世界の観客を標的としている。それは、彼の文字を解読できないことを前提とした観客である。むしろ西側世界の観客とても、シュー・ピンの「漢字」が漢字としては解読不可能なことくらい、知識としては知っていよう。だがそうした観衆には、彼の創意工夫による偽文字が判読不可能であるという事実を判読する能力が、原則的には想定されていない（中国研究者は別だろうが、彼らは標準的な「標的」ではありえない）。言い換えれば、解読できない偽文字であることを見抜けない人びとこそが、好適な顧客なのだ。たしかに彼らは「文盲」なのだが、彼ら自身は、シュー・ピンの作品を前にして、いかに自分たちが「文盲」なのか理解できない。

となれば、シュー・ピンは、一種の確信犯だといえるだろう。というのも彼は、みずからの贋作漢字あるいは紛い物漢字を公衆に対して展示するにあたって、自分が公衆を欺いていることに自覚的だからだ。それなら、この紛い物が効を奏するのは何故なのか。それは「自分たちがいかに欺かれているかを理解できない人びと」を騙しているだけではなく、それよりも大切なこととして、「自分たちが担がれていること重々承知している人びと」をも、シュー・ピンが抜け目なく、味方に取り込んでしまっている、という周到さにあるはずだ[4]。

それにくわえて、昨今では、シュー・ピンは自分の偽漢字は学習すれば読解できるし、習得することだって可能だと言い立ては始めている。実際彼は、自分の創作した文字を、漢字という表意文字の構成原理に則って増幅させている。基本的な部首を組み合わせることで、漢字は新たな語義を獲得し、それを伝達する自己組成の力学を蔵している。この漢字ならではの機動性を頼りに、彼はみずからの偽文字をブラッシュアップbrush upし、ヴァージョンアップversion upした。はたしてその成果は、正統なものとして認証されるのだろうか。だがそれは、将来における社会的な認知の問題であって、作者本人が全面的に責任を負う筋合いのものではあるまい。当初の海賊行為（というのも、それは、社会的な認知を得ない、偽金造りならぬ、偽文字造り、だったのだから）が少しずつ権威を帯び、最後には社会において、代替的なコードとして、まっとうに伝播循環されるに至る。そうした経緯を見事に擬態して演じたひとつの好例を、シュー・ピンに見ることも許されるだろう。

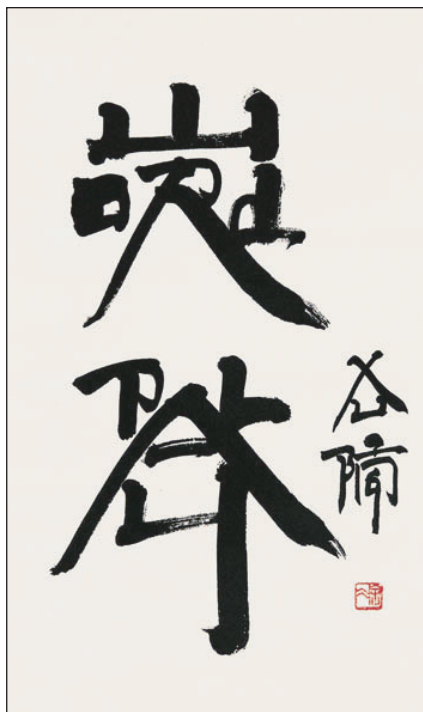
実際、歴史を振り返ると、同様の新字体創作は、漢字文明圏の周縁部において、何度となく繰り返されてきた。シュー・ピン発案の字体に近いものから見るならば、契丹文字（920年ころ制定）や西夏文字（1036年頃制定）は、北方の遊牧民族によって、中原の漢字文化圏への対抗を意図して発明されたものと見て、間違いなかろう[5]。みるから



ニー・ハイフェン トロヤの木馬 (2008, at Arario Beijing)



シュー・ビン Cultural Animal □ 1994



シュー・ビン Square Word Calligraphy Classroom
より 2011

に不必要なまでに複雑な文字構成からは、北方騎馬民族の中華の民に対する屈曲した劣勢複合を読み取る向きもあろう。だが、これらの「偽」漢字は、王朝によって正統なる文字とのお墨付きを得るや、公式な国事文書において、大手を振って使われるようになる。

その経緯や形態はさまざまだが、そこには周縁文化圏の中央にたいする抵抗の様子を読み取ってよかろう。日本におけるカタカナやひらがなも例外ではない。前者は漢字の部首の一部、後者は略字草書体を利用して表音文字を創案したものだが、これは漢字では表記に不便な地域言語を擁護することに繋がった。正規の漢文に対しては、補助的・従属的な役割に甘んじたが、女子の使用者たちは、やがて日本を代表する文学の書き手となる。李氏朝鮮の世宗による訓民正音の制定（1446年）は、世界でも稀な、あるいは唯一の完全に人工的な表音字母の開発といえる。ハングルもまた長らくのあ

いだ、表向きの漢字使用に対して従属的な位置にあったが、半島の民族主義が高まると、その受け皿として正統性を獲得し、やがては漢字排斥の根拠とされるまでの民族的矜持を託され、誇り高い地位を授けられる[6]。だが、これらはいずれも、中華中心主義の立場から評定すれば、しょせん周縁辺境地帯の「偽文字」として遇されても仕方のない、文化的劣位の表徴にほかならなかったはずである。

こうして見てくれば、中華文明圏とその外部とを橋渡ししようとする現代の中国出身の藝術家たちに、新たな偽文字創作が頻出することも、けっして偶然ではないことが了解されてくる。それは彼らの移民状況の「渡り」において、他者との意思疎通を容易ならしめようとする戦略の一端を担う媒体、彼らの実存が託された表現手段であった。

そして、ここまでくれば、ニー・ハイフェンやシュー・ビンが何者だったのかも

判明する。彼らはともに、往時の中国輸出用陶磁器や日本の輸出用漆器を製造していた職人たちの、直系の末裔である。彼らが現代に転生を果たした姿が倪海峰や徐冰だったといっても語弊はなかろう。

以上の議論を踏まえて、文化間翻訳における「海賊史観」を提起してみたい。文化を跨ぐ文物の流通にあつて、合法と非合法とは、表裏一体となるように運命づけられている。そのことを十分に理解するために、「海賊史観」は必要不可欠な視点を提供するはずである。

7. 文化間翻訳における株式市場モデル

「事情を知る者には了解できるが、それ以外の者にはまるで反対のメッセージとしてうけとられてしまうであろうメッセージをこっそりとテキストのなかに忍び込ませるというのは、どの時代にあつてもメディアと権力から疎外され、はからずも周縁地帯へと追いやられてしまった者たちが最後に訴える修辞的手段であつた」[7]。在日韓国・朝鮮人作家の置かれた状況を説明するなかで、四方田犬彦は適切にもそう述べている。これは必要な変更を加えれば、シュー・ピンやニー・ハイフェンにも、ぴたりと当て嵌まる観察だろう。

同様の機構は、より劣位あるいは従属的な位置にある言語のテキストが、より優位で支配的な言語市場へと翻訳される場合にも発生する。ここで譬えとして有効なのが、株式市場や為替市場の比喩だろう。上位の市場に「上場」されるためには、上場に必要となる条件を満たさなければならない。国際市場が世界文学に対応するならば、地方の自国語市場は地方文学や一国文学に相当するだろうか。地域文学は、特定の地域言語の枠内に閉じ込められるか、あるいは信頼できる読者層を失うことを恐れて、地域言語の枠組みを脱出したがらない。また特定の言語に特有の慣用表現はしばしば輸出不可能である[8]。このため世界文学への参入を望むような小説家や詩人には、colloquialな表現を自主規制する場合すらある。

ここまで輸出工藝や現代美術を例にとって分析してきた幾つかの事例も、そうした規制の扼や自己改革の痕跡を明瞭に、あるいは露骨なまでに刻み込んでいる。翻訳は言語的な流通のみならず、工藝品の交易や美術作品の需要供給といった、非言語的な流通にも必要とされる作業である。こうした分析は、言語的、非言語的な領域を跨いだ、より拡大された文脈において、翻訳がいかなる役割を担うのかを理解するうえで、役立つはずである。

地域産品を国際市場に売り込むとなると、さまざまな修正や改変を要求される。だがそれならば、グローバルな認知を受けるためには、どの程度まで地域特有の香りを犠牲にせねばならないのか。そして反対に、出身地ならではの「お国自慢」を発揮するためには、どのような要素に関して、どの程度まで国際的標準化を食い止めねばならないのか。それを両面から測定する必要がある。国際化とは異質性の排除による同質性の獲得ではない。あるいは、それだけで達成されるものではない。むしろ反対に何が「許容される異質性」であつて、何が「拒絶される同質性」なのかを弁え、そのうえでこれら一対の臨界のあいだの相互作用interplayを巧みに操ることこそが、商品市場の国際流通にあつて、賭けられている。

2012年現在の現今の世界では、ほんの数年前に喧伝されたばかりの経済のグローバル化globalizationが早くも危機に瀕している。そのいまこそ、闇の市場における海賊行為の実態が開明されねばなるまい。水面下の「闇市場」こそが、表面を覆っている「適法市場」を下支えしつつ、それを密かに攪乱してもいるからである。そしてややもすれば、地域流通通貨による地域市場が「闇市場」と同一視され、国際通貨によって決済される全球的市場が、合法的市場と見誤られる。ならばこそ、これらふたつの市場のあいだの二重構造を解明することが、政治学や経済学のみならず、文化研究の領域においても必須となるはずだ。

この文脈で岡倉覚三(1863-1913)に登場

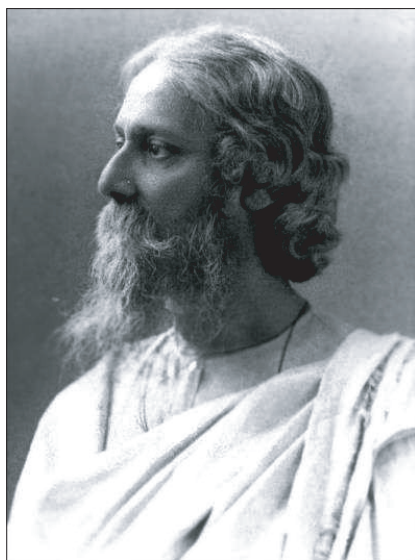
を願うのが相応しかろう。『茶の本』の伝説的な筆者は、ここで水先案内人の役割を演じるからだ。岡倉は外国に旅行する同国人に対して、次のような忠告をしたという。もし英語に達者ならば和服を着てゆくがよい。だが英語が不如意ならば洋服のほうが相応しいかろう、と[9]。ここで「英語」が国際的に通用する流通言語＝流通貨幣であるならば、岡倉は普遍的に通用する意思疎通の道具がないかぎり、地方色を見せびらかすのはお辞めにされたほうがよい、と論じていることになる。だが美術の世界に移して考えると、この譬えはいささか理解困難となる。「美術」なり「藝術」と呼び習わされる造形言語において、何が「英語」に相当するのだろうか？この問いが、われわれをベンガルの詩人へと誘う。

8. 「翻訳」と「遊び」：「臨界意識」にむけて

ラビンドラナート・タゴール（ベンガル音ではロビンドロナト・タクルに近い。1861-1941）はベンガル出身の詩人として著名だが、彼にとって英語は、終生、外国語として意識されていた。生粋の上流階級のイギリス人に



岡倉覚三



ラビンドラナート・タゴール

は、タゴールの英語に難癖をつける輩もあったからである。2013年は、このタゴールがアジア人として初めてノーベル文学賞を受賞してから百年にあたる。それに一年先立つ2012年には、同じくベンガル出身の、ガヤトリ・チャクラヴォルティ・スピヴァック教授に京都賞が授与された。この九九年の間隙はけっして偶然の産物ではありえない。スピヴァック教授を囲むワークショップの話題は、直訳するならば「言葉は翻訳を通してわれわれに何を語りうるか」[10]。翻訳を巡ってこの間の一世紀に何が発生したのだろう。また奇しくも、教授の最新著は『グローバル化時代における審美的教育』と題されている[11]。それはいかなる教育たりうるのだろうか。可能な回答は幾つもありえようが、ここではベンガルと日本とを結ぶたったひとつの文化交流史上の逸話に言及しつつ、この問いへの補助線を引いてみたい。

タゴールは生涯に二度しか岡倉に会っていないが、その出会いは深い印象を残したらしい。1929年の最後の日本訪問のうちに、インドの詩人は次のような証言を開陳した。それは岡倉が最初にインドに滞在した1901

年から翌年についての回想だった。タゴールによれば、岡倉は「しばしばきわめて安価な品物を買求めたのです。農民が使うような簡単な陶製の油のランプのようなものですが、それを忘我の様子で賞賛したのです。そうした品に、美の本能を認めることなど、それまでわれわれはできずにいたのです」と[12]。

日常の雑器に美を見出して、それを元来の文脈から連れ出すこと。だがそれは、日本の茶の師匠にとって、ごく当たり前なおこないだったはずだ。古来の宗匠は高麗の日常雑器だった茶碗を賞玩して、それを歴史的な名品に仕立ててしまった。それらには銘が付けられ、何世代にもわたって伝承された。その同じ通路を伝って、岡倉は、茶が自生した故地であるインドの、農民たちの生活のなかに、鍾愛すべき雑器を見出してみせたことになる。経済学が教えるとおり、文脈を外して移動させることで、そうでなければただのありふれた商品にも、思わぬ付加価値がつき、交易とともに、交換価値が宿る。これが商品交易の秘訣でもあれば、まただからこそ、そこには副作用として、「海賊行為」が否応なく発生する。

思えばタゴールは、『ギータンジャリ』すなわち「神への捧げもの」と題された母語韻文詩篇を、彼自身の手で散文に英訳し、この翻訳(1909)を通して、一地域言語であったベンガル語の詩を世界文学の一員へと昇格させた。同様に岡倉も、極東の茶の湯という審美的儀礼とそのための民衆工藝とを、彼の英語の出版物『茶の本』(1906)を通して、世界美術へと仲間入りさせることに貢献した。ともに、彼らの著作や言論を通じて、西洋の物質性に対する東洋の精神性の優位を、いささかならず誇張した。このふたりの営みを、あらためて、インド洋を跨ぐ商品取引のなかで成し遂げられた文化移植に重ねてみよう。先に述べた「海賊史観」という枠組みに照らして彼らの「文化翻訳」を再考すると、いかなる結論が導かれるだろうか。

ふたりの意図が成功裏に成就されたとす

れば、それはひとえに、これらふたりがともに、英米を中心とする西側世界の植民地制度の枠組みのなかで、何が許容され、有効な操作の臨界がどのあたりにあるかを、十分に弁えていたからだ、とはいえまいか。正規の流通経路では歓迎されない「ベンガル語の詩」や「茶の湯」といった地方的風習。それに、かたや(「英文学」に並ぶ)「英語文学」、かたや(西洋美術に並ぶ)「東洋美術」としてのしかるべき衣装を纏わせ、変身させ、脱皮させる。かくしてこの「バッタもん」(「商標登録」された紛い物)をまんまと流通させることもまた、「海賊行為」の一種にほかなるまい。

だが、こうした「海賊行為」を成功裏に成就させるには、その場を支配する「ゲームの規則」*règles du jeu*に精通している必要がある。「ゲームの規則」とは、社会学者のピエール・ブルデューお得意の用語だが、こうした不法なる取引を合法化するmake the illegal transaction legal,あるいは合法的に不法取引を成立させるmake the illegal transaction legallyためには、遵守すべき「ゲームの規則」に、いかなるマージンが残されているかを、過たず計測しておく必要がある[13]。これはフランス語では「規則の遊び」*jeu des règles*と呼ばれるが、「遊び」とはまさに、「からくり」がうまく回転するため隙間、大工仕事で言う、軸と軸受けとのあいだの「あそび」、すなわち「必要な隙間」の謂であり、そこから利鞘marginも生まれる仕組みである。「翻訳」による「渡り」が「遊び」を確保しているのだ。

「遊びの規則」と「規則の遊び」とのあいこ所、岡倉とタゴールの賭けを成功させた秘訣だった。だがそうだとすれば、その「遊びの規則」を制定し、そこに許される「規則の遊び」を融通する資格は、いったい誰に属するのだろうか。ここに文化のヘゲモニー(これを「覇権」と訳すのは誤訳だろう[14])という問題が提起される。世界を全球的に覆い尽くしている金融的な、そして知的な新植民地主義こそが、文字通り、世界大の

「海賊行為」であり、その支配のもとで、岡倉やタゴールのみならず、われわれひとりひとりともまた、いまなおその囚人のままで「小さな海賊行為」を続けている。

*第28回京都賞記念ワークショップ[思想・芸術部門]
The 2012 Kyoto Prize Workshop in Arts and Philosophy:
「翻訳という営みと言葉のあいだー21世紀世界における人文学の可能性」What Words Can Tell Us Through Translation: The Future of the Humanities, 国立京都国際会館, 2012年11月12日。は受賞者としてガヤトリ・チャクラヴォルティ・スピヴァック教授Professor Gayatri Chakravorty Spivakを迎えた。そのワーク

「脱植民地主義」などと呼ばれる、こうした知的植民地状況への有効なる抵抗を組織するために、問われるべき問いが、ここに開かれている[15]。

ショップにおける発表として準備した通訳用英語原稿, Shigemi Inaga, "Politics of Translation and Resistance to Globalization: Toward a Non-Hegemonic "Pirates" View of Art History," を日本語に訳出した。英語原文は現時点で未刊行である。ご招聘のご推薦を賜った、鷺田清一先生(委員長)をはじめとする専門委員会の皆様と、当日に司会を担当された井野瀬久美恵先生に謝意を表する。

[注]

- [1] 倪海峰についてはKitty Zijlmans, *The Return of the Shreds: Ni Haifeng*, Valiz, 2008.
- [2] Immanuel Kant, *Kritik der Urteilskraft*, 41; 64ff.
- [3] 稲賀繁美「位相空間のなかの21世紀世界美術史 (3)」『あいだ』147号, 2008年4月, 25-30頁。
- [4] 「偽文字」でネット検索をすると「偽文字発見」ゲームが見つかる。規範からの逸脱をハナから悪と決め付け、無批判に規範に準拠するような善良な市民を熏陶することこそ善とする価値観が見事に反映されており、偽文字発案の想像性・創造性涵養の教育的効能などには、まったく配慮がなされていない。またネチズン観察をしてみると、「偽文字」発見に血道をあげ、下手を犯罪人呼ばわりするがごとき素朴な正義感が、なんらの疑念もなく披瀝されている。通産省がIS規格の合理化を追求して文科省下の国語審議会の見解から逸脱する規格を「合法化」し、それが蔓延したのは、たしかに社会的事実だろう。だが、それを正統なる国字擁護の立場から糾弾する姿勢には、規範からの逸脱を抹殺することを正義と短絡する、狭量な性急さが露呈することになる。ひいてはこれが、大陸の略字排撃や、台湾の繁体字忌避と結びついて、感情的な隣国排斥などに飛び火し、無軌道な国粹唱導に発展しはせぬかと、背筋に寒いものを覚える。むしろ大切なのは、いかなる文化的条件が偽文字の創意や伝播を促すかの、社会心理的研究ではないか。
- [5] 愛新覺羅烏拉熙春, 吉本道雅『韓半島から眺めた契丹・女真』京都大学学術出版会, 2011年。
- [6] 参照, 稲賀繁美「朝鮮語学会事件再考」『図書新聞』2698-2699号, 2004年10月23日, 10月30日。
- [7] 四方田犬彦『日本のマラーノ文学』人文書院, 2007年, 8頁, 註38。
- [8] 川本皓嗣「和歌はなぜ「輸送」できないか」『図書』2011年11月号, 2-5頁。
- [9] 横山大観『大観画談』(大日本雄弁会講談社, 1951年)のほか、岡倉一雄『父天心』(聖文閣, 1940)にこの逸話が記録されている。
- [10] "What Words Can Tell us Through Translation: The Future of the Humanities," The 2012 Kyoto Prize Workshop in Arts and Philosophy. 和文では「翻訳という営みと言葉のあいだー21世紀世界における人文学の可能性」『第21回京都賞記念ワークショップ[思想・芸術部門]』, 国立京都国際会館, 2012年11月12日。
- [11] Gayatri Chakravorty Spivak, *An Aesthetic Education in The Era of Globalization*, Harvard University Press, 2012.
- [12] Rabindranath Tagore, "On Oriental Culture and Japan's Mission," *English Writings of Rabindranath Tagore*, ed. Sisir Kumar Das, Vol.III, 1996, p.605. この講演はタゴールの最後の日本滞在となった1929年5月15日になされた。以下の好著にも引用と分析がある。Rustom Bharucha, *Another Asia*, Oxford University Press, 2006, p.180.
- [13] Pierre Bourdieu, *Les règles de l'art, Genèse et structure du champ littéraire*, 1992; nouvelle édition, Édition du Seuil, 1998 ピエール・ブルデュー『芸術の規則』石井洋二郎訳, 藤原書店, 上下2巻, 1995, 1996年。
- [14] スピヴァックが依拠しているグラムシのヘゲモニー概念については、松田博・小原耕一「グラムシ・ヘゲモニー概念の展開と現代世界」『立命館産業社会論集』第41巻第2号, 2005年, 87-98頁ほか。白石隆『海の帝国』中公新書, 2000年, 134-5頁はhegemonyと覇権の違いを懇切に説いている。漢字概念としての覇道が王道の対概念である強権を意味するのに対して、ヘゲモニーは、その支配を受ける者たちが進んで能動的に関与することにより成立する権力装置を指す。ブルデューはその様な装置の代表のひとつとして共通語を挙げ、言語に発生する権力を論じた。人びとは義務教育を通じて共通語に支配されることによって差異化され、それに応じて現実的な権力を成員に対して発揮するからである。Pierre Bourdieu, *Ce que parler veut dire*, Faillard, 1981. ピエール・ブルデュー『話すということ』稲賀繁美訳, 藤原書店, 1994年。
- [15] 「海賊史観」の構想は、ほかでも何度か開陳している。「世界美術史の海賊史観にむけてー文明の海洋史観を越えてー」『あいだ』2012年4,5,6月号。それぞれ192号12-17頁, 193号25-29頁, 194号15-27頁。またここで提唱している「海賊」概念と、その世界史的な視野での意味の問い直しは、「交易の海賊史観にむけて」国際学術研討会「台湾において今なにが問題か」台湾大学, 2012年10月6-7日(招待講演)。